

2019 | FINAL REPORT



日中青年會議 2019 年度 報告書

July 19 – 25, 2019

“A conflict begins and ends in the hearts and minds of people, not in the hilltops.” –Amos Oz

2019 年度日中青年會議運營委員會

I. 概要

<概要>

事業名: 2019 年度日中青年会議

事業開催期間: 2019 年 7 月 19 日～25 日

事業開催国: 中華人民共和国 香港特別行政区

事業実施場所: ユナイテッド・ワールド・カレッジ 香港校 / Li Po Chun United World College of Hong Kong

事業主催: 日中青年会議委員会

監督者: Arnett Edwards

<参加者>

日中青年会議委員会オーガナイザー: 28 名

日本人参加者: 20 名

中国人参加者（香港・台湾を含まない）: 15 名

香港出身の参加者: 11 名

台湾出身の参加者: 5 名

<協力団体（敬称略）>

助成金・寄付: 双日国際交流財団、東華教育文化交流財団、三菱 UFJ 国際財団、MRA ハウス

宿舎提供: Li Po Chun United World College of Hong Kong

II. はじめに

今年度の日中青年会議は、総勢 53 名の参加者がユナイテッド・ワールド・カレッジ（以下 UWC）香港校に集い、7 月 19 日から 25 日の 1 週間に渡り開催されました。日本、中国本土、香港、そして今年度の新しい試みとして台湾を加えた計 4 地域の参加者とオーガナイザーが共に作り上げた活気溢れる 1 週間となりました。

本会議の目的は、参加者に、文化、経済、政治、様々な面において昔から深い関わりを持つ日中間の平和大使になつていただくことです。このために、日中双方の文化や歴史見解の理解と尊重、批判的思考、メディアリテラシー、など様々なスキルを身に着けるヒントを 28 名のオーガナイザーが知恵を合わせ、会議の中に散りばめました。

2009 年に始まり、今年度で 11 回目を迎える本会議が、多くの方々のご支援とご協力により無事終了しましたこと、実行委員一同大変感謝しています。2019 年度会議の模様をお伝えするため、本報告書を作成致しました。

＜会議理念＞

国際理解を通して、相互尊重の上に成り立つ建設的な未来を創造できる日中の親善大使を育成する。

＜特徴＞

会議企画・運営が生徒主体で行われており、またその多数は異文化理解を通じて平和な世界を構築することを目指して設立された UWC 在校生や卒業生、または過去の会議参加者が占めています。また、会議運営委員の多くが多様な国籍やバックグラウンド、また経験を持っています。会議に関わる一人一人がその経験を生かし、ユニークな会議運営に貢献しています。

＜成り立ち＞

日中青年会議は 2009 年に古川知志雄ら UWC 卒業生が UWC 香港校(LPC)在籍中に設立したプログラムです。中国本土と日本の両国から文化的影響を強く受けている香港に立地する香港校では、中国人と日本人の高校生が寝食をともにしながら、お互いの問題についても話し合う機会が多くあります。また、学校全体としての日中問題に対する関心も高く、例年日中関係の問題に関する Global Issue Forum(地球規模的な問題フォーラム)が開かれています。かつて政冷経熱と言われた日中間の信頼基盤の弱さを克服するというゴールを共有した高校生有志によって、本会議は始まりました。

<目的>

1. 若者の、日中関係とそれぞれの文化に対する理解を促す。
2. 自分達の持つ「知識」がどこから来ているのかを分析することによって、批判的思考の大切さを参加者に伝える。
3. 異なる意見を持つ同年代の仲間と議論をする機会を提供することによって柔軟な思考の大切さを参加者に理解してもらう。
4. 建設的な未来を作るにあたって、対話の重要性を考える場を提供する。
5. 自主的な奉仕活動に協力して取り組むことにより、日本・中国・香港それぞれの社会に貢献できる能力を身につける。
6. 日中の親善大使にユナイテッド・ワールド・カレッジの国際色豊かな校風を体験する機会を提供する。

III. 会議運営・計画



2019年度日中青年会議は上記のスケジュールで運営されました。2018年度会議終了後8月に2019年度日中青年会議運営委員が発足され、日本・中国本土・香港（台湾を含む）の3チームによる約1年間の企画・準備期間を経て今年度日中青年会議が開催されました。

<参加者選考>

昨年度と同様に3月に1次締め切り、5月に2次締め切りを設け参加者選考を実施いたしました。1次書類審査と2次面接審査の2段階選考を実施したことにより、文章力や語学力だけでなく、応募者の人柄や会議に対する熱意等、多方面から能力を測り参加者を選抜いたしました。

<今年度スローガン>

"A conflict begins and ends in the hearts and minds of people, not in the hilltops." - Amos Oz
「紛争は人々の心や精神の中で始まり終わるのである、丘の上で行われるのではない。」- アモス・オズ

IV. プログラム内容

1日目	・到着、開会式
2日目	・カルチャーセッション、コンフリクトマネジメントセッション、OCナイトトーク(1)
3日目	・メディアリテラシーセッション、歴史セッション、OCナイトトーク(2)
4日目	・香港探索、OCナイトトーク(3)
5日目	・ファイナルイベント、ピースコメモレーション、OCナイトトーク(4)
6日目	・ピース・イニシアチブ、閉会式
7日目	・最終荷造り・片付け、出発

本年度の日中青年会議では、日本・中国本土・香港に加え、新しく台湾からもオーガナイザー及び参加者を募り、4 地域合計 53 名の参加者が上記のスケジュールで日中相互理解、関係向上に取り組みました。セッション初日は、自らのバックグラウンドを再認識・共有する文化セッションや、異なる価値観を持つもの同士が根本から問題を見つめ、相互理解により解決を促すコンフリクトマネジメントセッションなどを行い、日中問題を議論する上で不可欠な礎を築きました。翌日のメディアリテラシーセッション、歴史セッションでは、地域間で互いに対する偏見が生まれる理由や、それが実際に及ぼす影響を話し合い、両国の間に立ちはだかる深い溝の原因究明、そして参加者が抱く偏見の可視化を推進しました。参加者の満足度が特別高かった香港探索においては、言語と文化の壁を超えて香港の個性的な雰囲気を味わいつつ、各バディグループ内で与えられたミッションをこなすことで、4 地域を跨いだより強く堅い絆を創り上げました。やや難易度が上がったファイナルイベントでは、外交という高度な視点からも、10 代らしく柔軟で独創的な政策提案を実施し、日中政治と自分らとを結び付けました。その晩参加者は自身の会議における挫折、後悔、そして成長を振り返り、ピース・コメモレーションの場で仲間同士心の内を打ち明けあけました。惜しくも安全面の危惧により校内で開催されたピース・イニシアチブの活動ではありましたが、各グループ工夫を凝らし日中友好の輪を社会に広げるキャンペーンを練り、それぞれの方法で行動に移しました。7 日間慣れない環境で英語での高レベルな議論が要求された本会議にも関わらず、参加者は熱心に時間の余す限り活発な交流を続け、最後は多くの感動と日中平和大使としての使命を胸に会議を終えました。

＜日中青年会議の特徴＞

- ・セッション外の交流の場

会議中は4つの地域（日本、中国本土、香港及び台湾）から来た参加者がルームメイト同士となり、寝食を共にします。そのため自然と地域を超えての交流が深まり、日常的な場面からお互いの文化の相違点に気づく事ができます。

- ・バディグループ

異なる国・地域からの参加者とオーガナイザーの計10名程度で組織されるバディグループは会議における小さな家族のような役割を果たします。会議中は毎日バディグループ単位での振り返りセッションを行い、その日学んだことや次の日に向けての連絡、また気づいたことや疑問に思ったことをグループ内で共有したりする場になっています。また、香港探索はバディグループごとに行われ、グループ間での仲が深ります。閉会式ではバディグループごとでパフォーマンスを準備しました。



Figure1 バディグループの集合写真

- ・参加者主導で取り組むセッション

会議のプログラムは参加者なしでは成り立ちません。オーガナイザーは参加者に何かを教えるのではなく、あくまでも参加者の学びをサポートする立場です。そのため多くのセッションは参加者自身が考え、自身の意思で行動することを要求します。例えば香港探索の経路は参加者自身が計画を立て、イニシアチブ・プランニングのプロジェクト内容はチーム内の話し合いによって決まります。バイリンガルのオーガナイザーが常に待機していますが、通訳が必要かどうか決めるのも参加者自身の判断に任せています。

- ・地域別ミーティング

会議中には地域別ミーティングも行われ、母国語で会議の振り返りを行います。自身の日本人または中国人としてのアイデンティティや価値観について正直に話し合ったり、どんな事で苦労しているか共有したりする事で自分と同じ国・地域出身の仲間を励まし合い、高め合うきっかけとなっています。

<開会式>

開会式は、それぞれが持参した民族衣装に身を包み、バディグループごとに分かれて座り、食事を楽しみました。その後、オーガナイザー一同による出し物の発表、参加者を温かく出迎えるスピーチが UWC 香港校の校長である Arnett Edward によって行われました。初対面であることもあり、序盤は多くの参加者が緊張している様子でしたが、終盤には食堂で笑い声が響き渡り、楽しい雰囲気に包まれました。

<文化セッション>

文化セッションは各 1 時間ずつ食、教育、ジェンダー、文化体験の 4 つの小セッションによって構成されていました。このセッション全体を通しての目的は、自らの文化を再認識すると共に、他地域から来た仲間達の文化を理解するというもので、4 つのセッションの内容を簡単に説明すると、食のセッションでは、日本、中国の異なる食文化を理解した後、日中の食文化を融合させた新しい御節料理を作るというアクティビティに移りました。教育のセッションでは、4 つの地域での学校生活、教育方針の相違点についてディスカッションを通して発見した後、その発見を短い劇を通して他のグループと共有するという内容でした。ジェンダーのセッションも同様に、ディスカッションを通して、ジェンダーが社会でどのように形づけられているか、という題を元に 4 つの地域での相違点を見出し、各グループでポスターを作成し、発表しました。文化体験のセッションでは、中国の伝統芸能である、ドラゴンダンスと太鼓を 2 つのグループに分かれて体験しました。

<コンフリクトマネジメントセッション>

コンフリクトマネジメントセッションでは、紛争を解決する力を身に着けることを目的とした 3 つのアクティビティが行われました。初めのアクティビティでは、2 つの国が島を取り合うというシナリオを元に「なぜ」それぞれは島を欲しがっているのかを考え、多面的で本質的な視点からそれが満足できる解決法を導き出しました。次のアクティビティでは、オーガナイザーが演じる身近な対立に参加者が仲裁者として入り、当事者としてだけではない対立との関わりを学びました。そして最後のアクティビティでは、参加者が日本、中国本土、そして国際連合などの第三者という 3 つのグループに分かれ、現実に起こっている問題についてそれぞれの立場や要求を話し合いで明確にしながら、共通の解決策を作り上げました。実際の日中問題だけでなく日常に起り得る対立をも盛り込んだことで、参加者は明日から実践できるスキルを身に付けることができました。

<メディアリテラシーセッション>

メディアリテラシーセッションでは、まず、メディアとは何かを話し合いました。時代の移り変わりに伴うかたちの変化に気付き、ひとつひとつの特徴について実例を通して学ぶことで、それぞれの媒体の適切な利用法を学ぶことができました。その後、参加者は尖閣／釣魚諸島についての記事を前に、それぞれはどこの地域のどのような新聞社により発行されたものかを予想して話し合いました。セッションの後半では、実際の日中関係に関わる事件について、実際に発行された記事やオーガナイザーが演じる事件の関係者へのインタビューを元に、できる限り「中立」に近い立場の記事を作成しました。メディアリテラシーセッションを通して、参加者は情報の適切な取捨選択方法を学ぶことができました。

<歴史セッション>

歴史セッションでは、「新時代における平和的な日中関係の構築に向けて、これまでと異なる視点に立って歴史を見つめ直し、その深淵にふれる」ということを主題に据えて 3 つのアクティビティを行いました。最初のアクティビティでは、参加者が日本あるいは中国の外交官となり、各国の権益を国内・外交・経済の 3 つの側面で分析した上で、下関条約（1894 年）の締結に賛成するか否かを再考しました。次のアクティビティでは、中立的な立場から日中の友好関係を促進するオリジナルの歴史の教科書を作成しました。日本と中国の歴史の教科書を参照する中で、同じ出来事でも表現や説明の量などの違いに気付くことができ、貴重な経験になりました。最後は、個人の歴史観などを問う質問が投げかけられ、参加者は自身の考え方を問い合わせたり、周囲とのディスカッションを通して他者の意見を吸収したりして、このセッションで学んだことを復習する良い機会となりました。

<香港探索>

会議中唯一キャンパス外で行われた香港探索では、バディグループごとに香港の名所をめぐりました。参加者は街を観光するだけではなく、各チェックポイントで出された名所に関するアクティビティにも挑戦しながら香港の歴史や文化を楽しく学ぶことができました。また、アクティビティも含め、バディグループで結束する機会が多かったため、参加者の心の距離が大きく縮まった 1 日となりました。

<ファイナルイベント>

会議も終盤に差し掛かり、1 週間の前半に行われたセッションの総括として、1 日がかりのファイナルイベントが実施されました。午前中のセッションでは、参加者が小さいグループに分かれ、領土問題をめぐる政策立案が行われました。各グループは、選挙が行われる前提で、異なるステークホルダーの立場や利益を考慮したうえで、第三者の視点から政策を練りました。ステークホルダーからのフィードバックも視野に入れ、改良を重ねた結果、それぞれのグループが柔軟かつ独創的な政策に仕上げることができました。

午後のセッションは、新しいグループを作り、前半と後半に分けて行われました。前半では、ディシジョン（決定）ゲームが行われました。仮定の領土問題に対していくつかのシチュエーションが与えられ、自分たちだったらどうするかをグループごとに話し合い、2つの選択肢から選ぶというゲームでした。午前のシリアスなセッションとは対照的に、参加者はリラックスした雰囲気でゲームに臨むことができました。後半では、「歴史に対する明確な理解は未来の衝突を防ぐ」というお題のもとで肯定派と否定派に分かれ、ディベートが行われました。参加者たちは、難易度の高いお題でありながらも、お互いに協力し合い、熱い論戦が繰り広げられました。

<ピース・コメモレーション>

ピース・コメモレーションでは、参加者が小さいグループに分かれ、1週間の会議を経て感じたことや日中関係に対する感情などをお互いに共有し、平和について考えました。部屋を暗くしキャンドルを囲んだ静かな環境の中で行うことで、参加者は自身の体験や考え方を率直に語ることができました。目まぐるしく過ぎていく会議に対して一旦立ち止まり、静謐な雰囲気の中で平和について考える良い機会となりました。

<OC ナイトトーク>

OC ナイトトークは、参加者に日本、中国、香港、台湾についての知識を増やしてもらうという目的の元、各地域のオーガナイザーがそれぞれで決めた話題について、30分間のプレゼンテーションを行うというものです。日本チームは、日本人の国民性の起源について、中国チームは、世界無形文化遺産について、香港チーム（香港出身のオーガナイザー）は、香港政治の歴史について、香港チーム（台湾出身のオーガナイザー）は、台湾の文化多様性や宗教についての知識を参加者に提供しました。夜9時半から行われていたにも関わらず、参加者は、投げかけられた質問に即答するなど積極的に参加する姿勢を見せていました。

<ピース・イニシアチブ>

このセッションは、4日間のセッションを通じ学んだことを元に、参加者各々が思い描いた平和を社会に広める目的で行われました。例年はキャンパス外で行われますが、今年は香港の政治的状況を考慮し、キャンパス内で行われました。参加者達はそれぞれ約6人ずつの小グループに分かれ、頭を捻りながら自分たちにできることを考えました。この作業には約6時間の時間が与えられ、その後1グループずつステージの上で堂々と発表しました。作詞作曲をしたグループ、動画やポスターを作成したグループなどその活動内容は多岐に渡っており、それぞれが豊かな想像力を發揮していました。他のセッションと一味違い、参加者が全てを企画、実行するという完全に参加者主体のもので、非常に楽しんでいる様子がみられました。

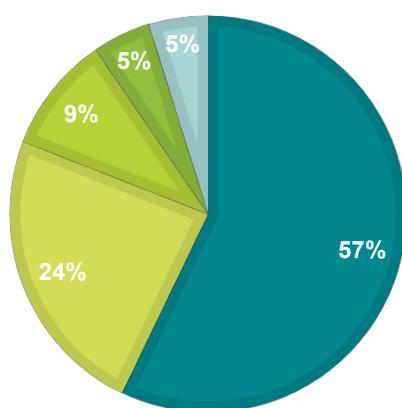
<閉会式>

開会式と同様に、バディグループごとにテーブルを囲み座りましたが、1週間前の緊張からは考えられない、まるで昔から仲の良い友達同士だったかのようにそれぞれのグループで会話を楽しんでいました。食事を堪能した後は、バディグループごとに準備を重ねてきた出し物披露、3言語（日本語、中国語、広東語）によって歌われる「手紙」の合唱、賞状授与の順に進行してきました。終盤に近づくにつれ、共に1週間を歩んできた仲間との別れを惜しみ、涙を見せる参加者もいました。

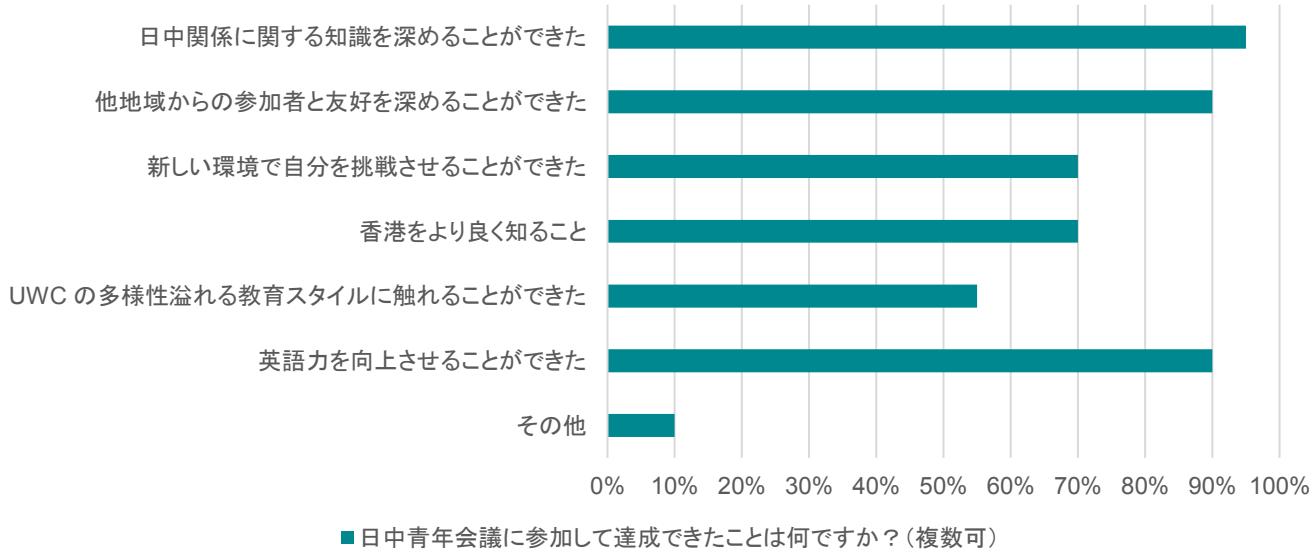
<参加者を対象とした会議後アンケート>

最も満足の高かったセッションはなんですか？

■香港探索 ■歴史セッション ■ピース・イニシアチブ ■コンフリクトマネジメント ■ファイナルイベント



日中青年会議に参加して達成できたことは何ですか？(複数可)



V. 参加者の声

日本で生まれ、日本で育ち、日本人の両親を持つ私は、小さい頃から日中問題についてのニュースを目にするとたび、当然のように何もかも中国が悪いと言うような意見を耳にしてきました。そして自然と、中国に対する悪いイメージを持っていました。

しかし、中国の友人たちとの出会いがそれを根本から変え、自分の考え方や視点に、教育やメディア、民族という集団、歴史的背景がどれだけ影響しているのだろう、そう疑問を抱き今回この会議に参加をしようと思いました。

様々なセッションを通して、中国、香港、台湾の友人たちと議論を重ねていく中で、自分がいかに日本という視点で物事を見ていたかを思い知らされ、日本人という民族、私が今まで置かれてきた環境の影響を大いに感じ、様々な局面から鑑みないと物事の真髄には近づけないと大いに痛感しました。

歴史を学ぶにしても、対立構造を理解し、双方の意見を鑑みた上で、どう解決していくべきか、これらを学ばなければ真に歴史を学んだとは言えない、この信念が私の中に生まれ、この概念を含め会議で学んだことすべてが私の世界観をまるで変えるものでした。

深夜寝ることを惜しまず仲間たちと語り尽した七日間、日中関係は一向に解決に向かうように見えないと思われる中、これからを担う私たちはどのような心構えで解決に向かっていけば良いのか、その糸口が垣間見えたような気がします。

小島美晴 (15)

日中青年会議に参加したのはたったの一週間だったけれど、その間に膨大な量の知識と考えを自分の中に吸収させていった。この会議で何よりも良かったことは、中国の同世代の人と納得のいくまで直接話し合い理解を深められたことだ。日本に住んでいると文化や政治体制が全く異なる中国について正しく理解する機会がほとんどない。会議前は、中国人は日本や侵略の歴史に対してどのように思っているのだろう、と中国人と一緒にして全ての人を見てしまっていた。日本人が持つ中国人のステレオタイプとしては、反日的で強硬な態度というのが多く、僕もそんなイメージを知らず知らずのうちに持っていたのだ。しかし、実際の対話を通じて中国から来た人の中でも様々な意見があることを知った。参加者は皆多くのことを勉強してきていて、中には驚くほど中立的な発言をする人もいて、僕のステレオタイプは崩れ去った。また、開かれた態度でお互いを知ろうとする積極性にもはや中国人、日本人という区分は無くなっていた。直接話し合ったことでの中国に対するイメージの変化は会議前には想像もできなかったほどだった。

実際は僕が思っていたステレオタイプの通りの中国人もいるのかもしれない。けれども様々な考え方の日本人がいるのと同じで、様々な中国人がいるのだ。当たり前といえばそうなのだが、一つの民族・国・集団としてひとまとまりにして、知っている情報だけで全ての人を判断してしまう怖さに気がつくことができた。

この会議で学んだことは、とても短い文章にまとめられるものではない。ただの学びではなくて、経験と共に自分に中に染み付いた学びだからだ。今後も、多くの学生が日中青年会議に参加し、この素晴らしい一週間を体験して日中関係の架け橋となつてゆくことを願って止まない。

本田純平 (15)

VII. 最後に

皆様のご支援とご協力を賜りまして、2019年度日中青年会議を無事終了することができました。

参加者が皆、限られた時間の中でもできる限りのことを吸収しようと積極的に行動し、異なるバックグラウンドから集った仲間との絆を深めている様子を目にし、私たちはこの会議が参加者53名それぞれに与えた影響を実感し、また未来への希望も生まれたように思います。不安定な香港情勢の中、例年とは異なるいくつもの障壁もありましたが、閉会式での活気ある雰囲気と参加者・オーガナイザー全員の団結は例年に負けない力強いものでした。

日中青年会議は4地域（日本、中国本土、香港及び台湾）の学生主体での運営となっており、例年会議に必要な資金を確保することが実行委員会の直面する課題となっています。その中でも11回目の会議を成功のうちに終了できたのもご支援・ご協力くださったみなさまのお陰です。

来年度会議に向けての委員会も既に組織され、より良い会議開催のために日々尽力しております。来年度以降もより多くの中高生に参加していただけるよう、さらなるプログラムの向上を目指しています。

改めまして、ご支援とご協力くださった皆様に深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

2019年度日中青年会議実行委員会一同

